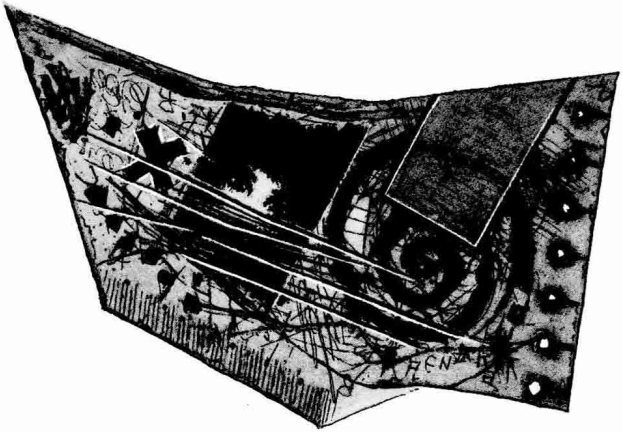
帰らざる夜

三好 徹

らざる夜

三好 徹



講談社版

帰らざる夜

昭和四三年四月二〇日　第一刷発行
著　者　三好徹
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
電話　東京（942）一一一一（大代表）
振替　東京三九三〇
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定価　四二〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 三好徹　昭和四三年

Printed in Japan

目

次

疑惑のとき……七
夜の匂い……二九
影の女……六七
妻の仮面……四四
背後のナゾ……三四
仮面の下の顔……一五九
暗い夜……一八三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

疑心暗鬼……二〇三
容疑者たち……二三
追跡……二九
終局……二六四
あとがき……二八一

装幀　水木　連

長篇推理小説

帰らざる夜

疑惑のとき

辺見武司は、寝過してしまった。浅い眠りのなかで、かれは妻の早苗とたわむれている夢を見ていた。早苗が誘うように逃げ、かれがそれを追いかける。そして手が早苗にとどきそうになったとき、電車が東京駅のホームに滑りこみ、その振動でかれは現実につれ戻された。

寝過したか、と胸のなかでつぶやきながら、辺見は反射的に腕時計を見た。八時半ちょっと前で、予定どおり川崎で下車していれば、大森にある自宅には、タクシーで帰りついているころだった。

辺見は大きくのびをしてから、ホームに降り立った。この一週間、ある電力会社の入札工事に参加するために、毎夜おそくまで残業した。この日も、工事の現場になる横須賀まで出張したのだが、自分で感じている以上に疲れがふかまっているようだった。川崎で降りなきゃいけない、といいきかせていながら、二十分も寝過してしまったのだ。

辺見はタバコをくわえながら、妻の早苗に電話しようと考え、売店の横にある赤電話の方へ歩み寄った。朝自宅を出るときに、いつもの時間には帰れるだろうといってあった。このぶんでは、九時す

ぎになってしまうにちがいなかった。

もうあと数歩というとき、辺見の前を歩いていた中年の婦人が、電話の朱色にひきつけられでもしたかのように不意に方向をかえ、電話器にとりついた。電話器がそこにあるから急にどこかへかける気になったという感じだった。電話を思い立ったのは自分の方が先なのに、と辺見は少し腹立たしかったが、といって押しのけるわけにはいかなかった。こうなれば一秒でも早く、この婦人が用件をすますことを願うしかない。

しかし、辺見の願いに反して、彼女はながながとおしゃべりをはじめた。なんということもない話題ばかりで、大げさに眉をひそめてみたり笑ったりしている。次に待っているものがいることを知らせるために、辺見はセキばらいをしてみたが、ちらりとかれの方を眺めたきりで、いっこうに終わらせようとしない。

辺見はいらいらしてきた。同じホームの神田よりにも売店のあるのが見えたが、そこに電話器があるかどうかはわからない。そしてその間、大森方面への国電が入線してきては発車して行った。

かれは、長電話の婦人を心のなかで呪った。そして女というのはどうしてこうなのだろうと感じながら、売店の電話をあきらめた。考えてみれば、ホーム下の構内にも何台かあるはずだった。それよりも、こうしている間に電車に乗った方が早く帰れるのだ。

鞄をかかえなおして、辺見は階段をかけ降りた。ホームの時計は八時四十分になっていた。十分以上も空費したことが、いまになってみると惜しい気もした。

乗りかえの地下道へ出て右に曲がろうとしたとき、辺見は、視線の片隅を横切ったものに惹かれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

て、思わず足をとめた。

小さな旅行ケースをさげた和服の女が、新幹線の改札の方へゆっくりと歩いている。後姿しか見えないが、その黒っぽい羽織や歩き方が、早苗に似ているように思えたからだった。はっとした辺見は、二歩三歩と追いかけようとして、ふたたび立ちどまった。早苗は華道の仕事で関西へ行くことがあるが、それは先週すましたばかりだったし、行くときは前もって辺見に了解を求めていた。いま、この時刻に東京駅にいるはずがなかった。

疲れているための目の錯覚なのだ、と辺見は自分にいいきかせた。それに、見知らぬ女性を早苗かと勘違いしたことは、なにも初めてではなかった。去年の秋に結婚してからはそういうことはなくなったが、挙式前は、似たような後姿の若い女性を見ると、はっとして声をかけそうになったことが何回もあったのだ。

その体験は、他人には話したことはなかったが、従妹の礼子には、血のつながった気安さでうちあけたことがある。礼子には、

「一種のおのろけね」

とひやかされた。かれはあえて否定しなかった。辺見自身、妻に対する愛情は世の夫族のだれにもヒケをとらぬという妙な自信をもっている。

辺見は頭を振った。どうもいけない、と思った。もうすぐ一年になるというのに、いまもってこのありさまでは、たとえ強がりにもせよ、女房がなんでエ、と威勢のいい言葉をはいて深夜までマージャンを打つ会社の先輩の境地に、達せそうになかった。

気がつくと、早苗に後姿の似た女は消えていた。やはり気がかりでならなかった。

思い過ごしかもしれないのだが、早苗が関西での仕事を引き受けるようになってから、夫婦の間に、目に見えぬ隙間風のようなものがしのびこんできたような気がしてならないのである。たとえば、数日前のことにしてもそうだ。入札価格を検討する会議が遅くなりそうだというので、辺見は、夕刻六時ごろ、早苗のところへ電話をかけた。しかし、発振音がひびいても、応答はなかった。買物に出ているのかもしれないと考え、会議のはじまる直前の七時ごろにもダイヤルを回したが、やはり応答はなかった。買物にしては、長すぎる不在に思われた。

十二時近くになって帰宅した辺見は、用意されてあった食事にハシをつけながら、いくらか強い口調で詰問した。すると、早苗は気を悪くしたようにいった。

「叔父さまのところでカラーテレビを買ったというので、ちょっと見に行ったのよ。とてもきれいだったわ」

叔父の辺見豪造は、亡くなったかれの父の弟で、政界関係の仕事をしている。辺見と早苗が住んでいるアパートから、歩いて十五分ほどのところにいるが、その家は、もともとは辺見の父親が全盛時代に建てたものであった。辺見は、豪造の妻の律代や娘の礼子は好きだったが、この叔父は嫌いだった。なにをして金を得ているのかわからぬところが、なんとなく不潔だった。早苗にもそれをいってあったはずだった。かれ自身、かなり長い間足を踏み入れていない。

といって、早苗に出入りを禁ずることはできなかった。礼子と早苗は、年齢もさしてかわらないし、かつて同じ仕事をしていたこともあって仲がいい。会社は違うが、ふたりともスチュワーデスだ

ったことがあるのだ。
辺見の気持を察したのか、あるいは咎めだてされたのがおもしろくなかったのか、早苗は、それ以上はカラーテレビのことにふれようとせず、夜着にきかえて寝室に入ってしまった。辺見は軽い後悔を覚えながら入浴し、それから寝室へ入った。
早苗はすでにベッドに入っていた。
辺見は自分の内がわに急速にふくれあがってくる欲望を感じた。そして、早苗の横顔を美しいと思いながらからだを滑りこませ、早苗の肩に手をかけた。
早苗は寝がえりをうつようにして、辺見の手をはずした。そのひょうしに夜着がほぐれて白い肌がこぼれた。かれはそっと唇を押しつけ、早苗の手を求めた。早苗は静かな寝息をたてたままであった。辺見は目を挙げて、彼女を見た。長いまつ毛は微動もしなかった。遅くまで待ちくたびれて疲れたのか、それとも、かれの詰問に対する怒りをそのような形であらわしているのか、辺見には判断できなかった。
辺見は不満だった。なにか侮辱されたような気がした。しかし、かれはそれに耐えた。電話をかけたとき、たまたま外出していたからといって、怒ったり疑ったりした自分の方が悪かったのだ、といいきかせた。それに本当に疲れて寝入ってしまったのかもしれないのだ。辺見と仲のよくない叔父の家に出入したことにしても、それはかれと叔父の豪造との関係だけのことであり、早苗が叔父の妻である律代や娘の礼子と仲よくするのを、辺見がとめる権利はなかった。
ところが、その翌朝、辺見は意外な事実にぶつからねばならなかった。

大森駅で電車を待っているとき、かれは背後から、
「武司さん」
と声をかけられた。振り向くと、礼子が立っていた。
「やあ、きみか。お勤めもしていないのに、朝早くからどこへ行くんだい？」
「パパの使いで鎌倉まで行くのよ」
「それじゃ反対の方角だな。助かったよ」
「助かったって、なんのこと？」
「きみのおのろけを聞かされなくてすむからさ」
礼子は劇団北斗座の若手俳優である塩沼謙次という青年としばしばデイトしている。そのことを早苗から聞いていたので、辺見はそれとなくひやかしたのだ。かれが早苗と婚約していたころの、礼子のひやかしに対するお返えしの意味もあった。
「武司さんったら！」
と礼子は、ちょっとにらむようにした。
「怒ることはないだろう。それより、しばらく寄ってみないけれど、叔母さんたちは元気かい？」
「ええ」
「カラーテレビを買ったそうだけれど、景気がいいんだね」
すると礼子がふしぎそうな表情をした。
「あら、買う話はでているけど、まだ買ってはいないわよ」

そのとき、電車が入ってきた。礼子は軽く手を振ってそれに乗りこんだ。
辺見はしばらく呆然とした。かれが乗る電車が入ってきたのにも気がつかなかった。
これはいったい、どういうことなのだろう？　と辺見は立ちすくんだ。前夜、早苗は、不在だった理由を、叔父の家で買ったカラーテレビを見に行ったため、と説明した。しかも、彼女は、買ったという話を聞いて見に行ったが、じつはまだ買っていなかった、といったのではない。「とてもきれいだった」という感想までのべているのだ。
その日は、辺見は、仕事の上で軽いミスをくりかえした。早苗は、なぜ嘘をついたのだろうかという疑惑に悩まされつづけた。
それを問題にすべきかいなか、さんざん迷ったすえ、かれは、ある決意をかためて帰宅した。黙って見すごせば、もっと悪い結果を招きそうに感じたからである。
辺見はなにげない口調でいった。
「きょう、駅で礼子に会ったよ」
早苗のからだの動きがとまった。彼女は目を細めるようにして辺見を見つめてから、不意に声をあげて笑いはじめた。そして、
「わたしって、しようのないおバカさんね。すぐにわかるような嘘をつくなんて！」
辺見の方は、笑うどころではなかった。からだを堅くして早苗を見つめるばかりだった。それをもみほぐすように早苗はいった。
「本当はね、買物の帰りに、パチンコ屋へ入ったのよ。玉を五十円買ったら、ドンドン出るの。とこ

ろが、急にバッタリ出なくなってしまったのね。それで、こんなはずはないと思って、また五十円買い、次に百円買いするうちに、とうとう五百円も損してしまったのよ。だから正直にいえなくて、つい……」

「きみは、そんなことくらいで、ぼくが怒ると思ったのかい？」

「いいえ、そうじゃないわ。そんなことで五百円も無駄にするなんて、働いているあなたにすまないと考えたのよ」

そういうと、早苗は辺見の胸に顔をうずめるようにした。

そうされると、辺見はもはやなにもいえなくなってしまうのだった。かれは、いたわるように早苗の背をなで、その豊かな髪に接吻した。

だが、考えてみると、五百円の金が、辺見たちにとって、家計を圧迫するほどの出費といえるだろうか。たしかに、かれらは、両親が生きていたころほどの贅沢はできなくなっているが、それだけの金がなければ困るということはないのだ。かれの給料のほかに、早苗が春からはじめた関西での仕事からも、ある程度の収入があった。しかし、辺見は、そのことでこれ以上頭を悩ますことを忘れようとつとめた。早苗への愛情を自分で傷つけるように感じたからだった。

にもかかわらず、辺見がまたもや頭を悩まさねばならなくなったのは、この日の朝のことだった。

かれが目をさましたとき、横に早苗の姿はなかった。そして、キッチンルームから、押し殺したような彼女の声が聞こえてきた。

「そりゃ、困ったことになるかもしれないわねえ……そうよ、それはお互いさまよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c